

随 想

## ルーマニア・バイアマレ市訪問記

石垣 武男

平成4年5月8日夕刻、ルフトハンザ機がルーマニアの首都ブカレストのオトペニ空港に着いた時、機内から空港の整備状況を見て、少々心配になった。案の定、到着口からビル内に入る時に戸外でかなり待たされて、これが首都の国際線空港かと疑いたくなった。税関でもまた、手続きに時間がかかっており、私の少し前にいたパキスタン人のグループは20分位もめた挙句あげくストップされてしまった。心配顔で近くにいた係官の顔をひょっと見たら「日本人はまったく問題ないよ」と英語で話しかけてくれた。何故私が日本人と分かったのか不思議であったが、多分顔付きや体型からであろうか。この点は自分は標準的日本人であると常日頃自負？しているところである。実際小生だけは型どおりの質問だけですんなり入国できた。空港出口ではルーマニアの友人の知人が息子さんと一緒に出迎えにきてくれていて、先ずは一安心。車で市内を案内してくれたが、さすがに人口200万都市であり大きな町である。街の中央部のテレビ局やブカレスト大学などのあるところは1989年12月の革命の場所であり、日本でも革命の詳細が放映されテレビで見たので、見覚えのある場所も所々あった。2000人もの市民が命を失った場所であり、道路の中央に記念碑（と云ってもまだちゃんとしたものではない）が立てられていた。ビルのあちこちに銃弾の痕もみられた。彼女の自宅（市内はすべてアパート）でくつろいだ後、夜行列車でルーマニア北部の都市バイアマレへ向かった。列車は二人使用の部屋であったが幸い一人で専用でき十分睡眠がとれた。翌朝バイアマレ市に到着し、駅には今回のルーマニア医用物理学会長である友人のロディカ・アレク氏とバイアマレ公衆衛生所長のフェデンチ・ヤノス氏が出迎えてくれた。バイアマレ市はルーマニア最北端のマラムレシュ州の州都であり、人口は15万の美しい町である。山の向こうはウクライナ、ハンガリーである。また町の郊外はもとはハンガリー領であり、現在でもハンガリー人の居住区域である。現在はルーマニアに所属しているが、他の国のような争いはいまのと

ころなく平穩であるとのことであった。実際ヤノス氏はハンガリー人である。しかし一見美しいこの町は実は公害の町でもある。それはこの地が鉱脈の豊富な所であり、高品質の鉛が露天掘りできるためチャウセスク時代には公害を無視して採掘し精製したため、鉛中毒が多発している。また金・銀・クリスタル等も豊富に埋蔵されているとのことで、それに関連した精製機関からの汚染も現在でも問題になっている。ルーマニアの平均寿命が70歳であるのに、この町では60歳であると聞いて愕然とした。

さて学会であるが、創立30年のバイアマレ大学の講堂で5月11～14日の4日間行われた。特別講演は小生と、ベルギーの有名な生物物理学者 Andre Wambersie, イギリスのブリストル大学の医用物理学科の Sir Henry Laurence, ロンドンの St.Bartholomew's hospital の放射線物理科の Prof.David R.White の4人で行われた。賑々しいセレモニーの後、学会が始まった。小生は名古屋大学におけるPACSについてCR画像の説明を含めて講演したが、反応は大であった。もっとも、ルーマニアでは全国でCTがまだ4台しかない状況であり、CR, PACSについては非常にショッキングであり、早く日本のように復興しなければいけないという議論にまで発展してしまった。勿論導入するのにどの位費用がかかるのかといった質問もあった。

一般演題は30数件のみで、治療に関連したものが多かったが、日本との格差は著しいものであった。一般演題およびその質疑応答は盛んであった。一般演題では英語への通訳がないため内容的にどの程度のものかは定かではなかったが、わが国ではすでに基本的な事実であるようなことを発表しているようであった。2年前の革命以前は、新しいことを追究する学問も非常に制限されていたとのことで、無理からぬ現状と思われた。この学会自体も創立2年目ということであり、我々が少しでも協力できるのであれば幸いであると感じた。市内唯一のバイアマレ病院は600床規模のものであったが、もちろんCTはなく、血管撮影装置もなかった。一般X線機器はハンガリーやドイツ製の年代ものを使用しており、テレビ透視はあるものの、遠隔操作ではなく、また現像機は手現像方式を改良した自動式であった。診断科の先生にこの現状はどうかと聞かれて返答に困ったが、率直に「日本でいったら丁度私が卒業した25年位前の状態であるが、大事なことは機械でなく医師が如何にそれを使いこなすかであり、深い洞察力と熱意である」と答えたら納得していた様子であった。治療機はロシア製のコバルト遠隔装置が3年前に導入されたが、表在および深部

X線治療機も現役で活躍していた。5月はすでに夏時間で時計の針は1時間日本より早いわけであるが、病院では医師をはじめとする職員は朝7時から午後1時まで、計6時間だけ仕事をするだけであった。昼食が一日の内では主であり、招待されて何うと、2時頃には一家皆で団欒するといった雰囲気であった。「何故6時間しか働かないのか？」と2～3人に聞いたが「もつと日本のように働いて復興しなければいけないのに、その気はあるが6時間以上病院にいてもやる仕事がないのだ」とのことであった。また「国民を引っ張っていってくれる人物がないのでだめだ」「40数年にわたるチャウセスク政権のもとで、皆が競争意欲を失ってしまったのだ」ということも聞いた。「日本でも最近国家公務員は土曜日は仕事日ではなくなった」というと「我々は生まれた時からそうだ」と。休みの日には、周辺の湖や山へ家族や友人と遊びに行ったり、家で音楽を聞いたり、ビデオを見たり、読書をするとのこと。確かに皆家には書齋があり沢山の書籍が並んでおり、歴史、文学、地理、宗教、芸術等に関するものが豊富に揃っていた。会話をしても自分の専門以外、医学以外の話が豊富であり、精神的には生活を楽しんでいるという感じがした。我が国ではこういった会話はあまりしないようである。自分にそういう教養がないこともあり、日本の文化や政治等について色々聞かれても満足に答えられないのが常であり、場合によると向こうの方が日本についての本を読んでよく知っていることもあり、恥ずかしい気がする。わが国でも土曜休みになって皆こういった教養を身につけるような余裕ができればよいと思うが、色々な娯楽が普及してしまった現状ではなかなかわが国では難しいような気がする。またそこが日本が現在経済大国たる由縁でもあるかもしれない。

さて泊まったホテルは田舎町にしては立派な所であったが、1989年の革命までは共産党の幹部たちの専用ホテルであったとのこと。また病院内のコバルト治療室の隣に大きな部屋があり、そこである夜主催者側がレセプションを開いてくれたが、その部屋は、毎月共産党幹部連中が飲めや歌えのドンチャン騒ぎをした部屋であった。我々もその部屋で飲めや歌えのドンチャン騒ぎをしたのであるが、病院内でこんなに騒いでよかったのかなと後になって思った。ルーマニアでの食事はインドとは違い全く抵抗はなく、幾分塩気は強いがやはりヨーロッパだなあという感じであった。水道水もそのまま飲んでも大丈夫であった。アルコールはコニャックと称する、マッチの火で引火する程強い度数ものが朝から供され、一口飲むと目が覚めると言われた。確かに目が覚めた。

この街でも市内はすべてアパートメント式の住居であり、新しい中心街では1階が店舗になっていた。食糧や衣服などは豊富に売られていた。生活必需品の価格は日本からみると10分の1以下であった。しかし物価の上昇は著しいとのこと。立派な革製の大きい旅行カバンが6～7000円で売られており吃驚したが、彼らの月給では精々4個しか買えないらしかった。ヤノス先生が子供が空手を習っているのでは是非みてくれとのこと、夕方中学校の体育館を訪れた。50人位の子供や中・高校生が「一、二、三……」（日本語で）と言いながら基本的な動作を繰り返していた。空手はルーマニアでも非常に盛んであるとの由。2～3人から「ここの空手教師はルーマニア人だが、貴方が見てこれは本当に日本の空手か」と聞かれて困ってしまった。なにしろ空手の練習を見るのはこれが初めてなのだから。

1週間のバイアマレ滞在後再び夜行列車でブカレストへ向かった。今度はブカレストの水処理工場の技術者と称するルーマニア人と同じコンパートメントで、ルーマニア語とへたな英語で話ながら、結構わかるものだが、翌朝ブカレスト駅へ着いた。駅では一足先に戻っていたジョアン先生が車で迎えに来てくれており、彼の自宅でしばらく休憩後空港へ向かった。学会の感想を聞かれたので、なかなかしっかり組織されていた会議であった旨を伝えた。彼もうなずいてはいたが、しかし色々まだ問題が山積みされていること、招待者故の歓待であることも付け加えていた。たった1週間の滞在では何も分からないのも確かであるが、インドと同じくもう一度訪ねてみたい国であることは確かである。

(名古屋大学助教授・医学部放射線医学教室)